



Title	冷戦とアポロ計画 : 米国宇宙政策における競争と協力
Author(s)	渡邊, 浩崇
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/58553">https://hdl.handle.net/11094/58553</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【1】

氏 名	わた なべ ひろ たか 渡 邇 浩 崇
博士の専攻分野の名称	博 士 (法 学)
学 位 記 番 号	第 2 4 1 6 2 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 22 年 9 月 22 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 法学研究科法学・政治学専攻
学 位 論 文 名	冷戦とアポロ計画－米国宇宙政策における競争と協力－
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 坂元 一哉 (副査) 教 授 河田 潤一 教 授 瀧口 剛

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、一九六〇年代の米国宇宙政策の中心であったアポロ計画が、米国外交の一端を担いつつ宇宙政策全体の中でどのように決定され、実施されたかを歴史的に検証することで、アポロ計画を含めた宇宙政策を当時の米国冷戦政策全般の中に位置づけたものである。

アポロ計画は冷戦における米ソ宇宙競争の象徴として語られることが多い。しかし、これまでの宇宙政策研究において、米国はアポロ計画によって本当にソ連との競争を求めたのか、それとも協力の道を探ったのかという論点が存在してきた。その論点に関して、本論文では以下の二つの点でアポロ計画の再検証を行った。第一点は、先行研究によってアポロ計画がソ連との競争だけでなく協力のためにも推進されたことは明らかにされてきたが、なぜ競争から協力を、逆に協力から競争に変化したのか、あるいは同時に両方であったとしても優先度はどちらにあったのかについて検討した。第二点は、米国の各政権がアポロ計画だけでなく、宇宙政策全体によってソ連との競争と協力の両方をどのように追求したのかを明らかにした。アポロ計画が米国宇宙政策の中心であったことは間違いないが、ソ連との競争と協力という観点で、アポロ計画と他の宇宙計画との関係がいかなるものであったかということは、これまであまり分析されてこなかった。

これら二つの点で分析を進めたことによって、冷戦におけるアポロ計画の目的と意義について再評価を行い、国際政治における宇宙政策の意義についても考察した。分析に当たっては、先行研究および従来の資料に加えて、冷戦終結後に順次公開された資料を利用した。

第一章では、アイゼンハワー政権が、人類初の人工衛星打ち上げを試みるという米国初の宇宙政策を決定した後、ソ連に先を越されるというスプートニク・ショックを経験したにもかかわらず、終始ソ連との競争よりも協力を意識して、将来の月への米ソ競争を想定したアポロ計画を却下したことを明らかにした。第二章では、ケネディ政権が、ソ連との月への宇宙競争において米国に勝利をもたらすべくアポロ計画を決定したが、その一方で米ソ宇宙科学協力の模索を継続しながら、世界的な緊張緩和を促進するために米ソ共同有人月探査を提案して、その実現に努力していたことを論じた。第三章では、ジョンソン政権が、ソ連の強硬姿勢などを理由として米ソ共同月探査の可能性を放棄して、アポロ計画を再びソ連との競争のために推進し、宇宙科学協力の模索や国連における宇宙条約の策定によって、ソ連との協力を追求したものであったことを述べた。第四章では、ニクソン政権とフォード政権の宇宙政策が、アポロ計画によってソ連との競争に勝利した後、スペース・シャトル計画によってその競争を継続した一方で、アポロ・ソユーズ計画によって協力を実現したものであったことを明らかにした。

結論では、まず、米国の各政権が外交と内政の状況変化に応じて、宇宙政策全体におけるソ連との競争と協力

のバランスや優先度を変化させる中で、アポロ計画を決定して最後まで実施したことを指摘した。その上で、アポロ計画の目的が、国力と理念を誇示して米国の国際的地位を向上させる一方で、国際協力を進めて冷戦の緊張を緩和することであったと論じた。前者の目的はほぼ完全に達成され、後者の目的は他の宇宙計画とともに宇宙政策全体としてはほぼ達成されたことを述べ、アポロ計画を米国冷戦政策の輝かしい成功例であったと評価した。

最後に、アポロ計画のような宇宙政策が全体として、冷戦下の国際枠組みに非軍事的な競争と協力の場を提供したこと、さらに「宇宙」というものが、国家間の透明性を高める機会と、国家を超えた地球全体を一つとしてとらえる視点を国際政治に与えたことを付言した。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

学位申請者の論文は、人類を月に送ることに成功したアポロ宇宙計画が米国宇宙政策全体の中でいかに決定され、実施されたかを検証するとともに、アポロ計画を含めた宇宙政策の意義を米国冷戦政策全般の中に位置づける歴史研究である。

本論文は冷戦下の米国の宇宙政策が全体としてソ連との宇宙競争の側面だけでなく、宇宙協力の側面を持っていたことを確認し、アイゼンハワーからニクソンまでの各政権が外政と内政の状況変化に応じてその二つのバランスや優先度をさまざまに変化させた過程を跡づける。その上で、アポロ計画が米国の国力と理念を誇示して米国の国際的地位を向上させる一方で、他の宇宙政策と合わせて冷戦の緊張緩和にも役立つものであった、と結論する。

第一章では、アイゼンハワー政権がスプートニク・ショックを経験したにもかかわらず、終始ソ連との競争よりも協力を意識して、将来の月への米ソ競争を想定したアポロ計画を却下した過程が描かれている。従来、曖昧に論じられることが多かった「ミサイルギャップ」と「スペースギャップ」の相互関係を明確にしている点に価値がある。第二章では、新資料に基づいて、ケネディ政権によるアポロ計画の決定から米ソ共同有人月探査の提案までの経緯を実証している。ケネディ政権はソ連との宇宙競争での勝利を求めてアポロ計画を決定したが、その一方で米ソ宇宙協力を模索して共同の月探査を提案した。第三章では、ジョンソン政権期に、ソ連の強硬姿勢などもあって、米ソ共同月探査の可能性がいかに消滅していったかが詳述されている。ジョンソン政権はアポロ計画において競争の側面を強調した。しかしその一方で、宇宙条約を制定することにより競争と協力のバランスをはかろうとした。第四章では、ニクソン、フォード両政権がアポロ計画に成功した（1969年）後、デタントの中で、アポロ・ソユーズ（ドッキング）計画という宇宙協力を推進したこと。その一方でスペース・シャトル計画によって宇宙競争をも継続したことが明らかにされている。

本論文は多数の文献資料を丹念に収集し（数度にわたる米国での調査を含む）、それらを使って、アポロ宇宙計画の展開とそこにおける「競争と協力」のありようを活写している。主張は論理的かつ実証的であるとともに、「競争と協力」のバランスを問題にするなど独創性もある。宇宙政策の歴史という国際政治学でも先端分野のわが国での研究水準を大きく引き上げる論文となるであろう。

本論文は、申請者が自立した研究者として、その能力・知識を十分有していることを証明しており、博士(法学)の学位論文として十分価値あるものと認められる。